

■沖縄タイムス記者・新垣綾子

2017年10月6日付沖縄タイムス

・膵臓がんで夫を失った島袋百代さんが専門看護師を目指す



がん看護専門看護師を目指す島袋百代さん（右から2人目）と長女の萌花さん（左）。11月に浦添市で開かれるがん患者支援イベント「リレー・フォー・ライフ」の実行委員として看大祭で出展した＝9月、県立看護大

那覇市の看護師島袋百代さん(49)は、病院勤務の傍ら「がん看護専門看護師」の資格取得を目指していた昨年8月、54歳の夫をがんで失った。「こんなに身近な人の病気に気付けなかった」と自分を責め悲嘆に暮れたが、患者家族や遺族となり、目標への決意は強まった。今年4月、夫の看病のため1年間休んでいた県立看護大大学院に復学して研究を再開。闘病の悩みや本音を受け止める、患者・家族に一番近い医療者になろうと努力を重ねる。(社会部・新垣綾子)

「背中が痛い」「胃がおか
ったのは昨年2月。クリニッ
しいな」。専門学校教員だ
った夫の一史さんが、しきり
月ほど後、紹介先の病院で
に体調不良を訴えるようにな
うやく診断が確定した。早期

「専門看護師」を目指す島袋百代さん

がん患者に近い医療者へ

就学中に夫他界 強く決意



故島袋一史さん

発見が難しく悪性度が高いとされる膵臓がん。仕事柄、夫のCT画像を見た瞬間に肝臓など他臓器への転移を悟った。「もう長くない」。目の前が真っ暗になり「どうしよう、どうしよう」と混乱した。

がん患者・家族の相談に乗る、医師など多職種との調整を担うエキスパートになるため、島袋さんは2014年春に大学院へ進学していた。日中は病院に勤め、夜間に院で学ぶハードな毎日。そんな妻の決意を誰よりも応援してきたのが一史さんだ。優しく温和で。しかし望みを託した抗がん剤治療も効果はなく、告知からわずか約4カ月後、帰らぬ人となった。

看護師であると同時に患者家族、そして遺族に。島袋さんは痛感した。がんは治療の選択肢が多く、短い時間にさまざまな意思決定を迫られる。だが「患者の側に立てば早く、早く」よりも、じつ

くり気持ちを聞いてほしい」。「大の父親っ子」だった一人娘の萌花さん(16)は一史さんが亡くなってからも、しばらく涙を見せず明るく振る舞った。「つらいから、お父さんのことは考えないようにした」と明かし、最近「お父さんとの思い出が消えてしまいたい」と不安を口にする。

がんは家族にとっても人生を揺るがす体験だ。苦しみや悲しみの感情にふたをする一方、死別の現実には戸惑う萌花さんを見守りながら、島袋さんは人知れず悩む家族や遺族のケアを一層大切に思うようになった。

10月以降はしばらく休職し、来春の卒業に向け修士論文の仕上げに入る。専門看護師になるには卒業後も多くの課題や認定審査をクリアする必要がある、たやすい道ではないが「私だからこそ、できる支援があるのかな」と奮い立つ。「治療だけでなく当事者の生活に幅広く目を向け、より良い選択を一緒に考えていける存在でありたい」

▶ことば 専門看護師

5年以上の実務経験に加え、看護系大学院で専門知識とスキルを習得した看護師に対し日本看護協会が認定する資格。「精神看護」「老人看護」「感染症看護」など13分野あり5日現在、県内では5人が「がん看護」の資格を取得している。

・島袋百代さん支部長に、膵臓がんの患者会が発足

膵臓がん患者団体発足

県支部 情報発信 悩み共有へ

早期発見が難しく治りにくいとされる膵臓がんの患者支援団体、NPO法人パンキャンジャパン（東京）の県支部が今月発足し、患者・家族や医療関係者への活動周知に動いている。支部長を務めるのは沖縄赤十字病院の看護師、島袋百代さん（49）。2年前、54歳の夫一史さんを膵臓がんで亡くした経験を原動力に「治療に関わる情報不足や、悩みを共有できる場が少ない現状を変えたい」と願う。

医師「治療に好影響」

膵臓は胃の後ろの深部に
あるため、患部が特定しづ
らく発見時にはすでにがん
が転移し手術できないケー



膵臓がんの撲滅と患者・家族支援のシンボル、パープルリボンのバッジを指す看護師の島袋百代さん（右）と外科医の豊見山健さん＝5月31日、那覇市・沖縄赤十字病院

スが多い。一史さんも、その1人だった。

進行中の治療や新たな治療法がないか、島袋さんはわらにもすがる思いで情報を求めたが、難治性がんだけに他のがんに比べてサイバー（経験者）が少なく、県内には患者団体もなかった。パンキャンジャパンに出会い、悩みを聞いてもらうことで不安が和らいだのはそんな時だ。同時に「情報の発信源や相談先が沖縄にもあれば、救われる人がいっぱいいるのに」と強く思った。

一史さんが亡くなって間もなく、深い悲しみを抱え

ながら長女（16）と共に東京であった膵臓がんの啓発イベントに参加。中学生の時に父親を失った男性の「悲しみは人を強く結び付ける。大きな悲しみをエネルギーに変え、膵臓がんを治る病気にするため前進しよう」とのスピーチにも心を動かされた。

電話での相談や語り合う場の企画、治療や食事に関する勉強会…。支援者を増やしながら、そんな取り組みを形にしたいと思い描く。赤十字病院の同僚で一史さんの主治医でもあった外科医の豊見山健さん（49）も、顧問医師として県支部に参加。「当事者同士がつながることは、治療にもいい影響を与える。沖縄で活動を広げるため一緒に頑張りたい」と島袋さんを後押しする。

県支部の問い合わせは島袋さん、電話090（4988）8729。